

秘密にしたかったのに（メール）

今週は、理科室掃除当番。みんなめんどうなことをしたくないから、誰もゴミ収集所へ持っていかない。しかたなく、今日も私がゴミ収集所へ運んだ。もどつてくると、もうみんなはいない。一人さみしく理科室の鍵を職員室に返して部活動に行った。

次の日の掃除の時、

≪今日も私がゴミ捨てに行くのか…≫
と、考えていたとき、

「ユウコさん。今日はボクが運ぶよ。」

同じ班のヤスシ君は、そういつてゴミ箱をゴミ収集所まで持って行ってしまった。いつも私が運んでいたのに……。みんないなくなってしまった教室で、窓を閉めながら、ヤスシ君が戻ってくるのを待っていた。

なんてお礼を言おう。

でも、昨日まで私がしていたことだから、お礼を言うのは変かな。

「あれ、なにしているの？」ヤスシ君はそう言いながらゴミ箱を置いた。

「ありがとう。いつも私がしていたのに。」

「明日から順番にするように、みんなに話すよ。鍵を閉めるよ。」

ヤスシ君はそう言つて、私がいつも返していた理科室の鍵を持って職員室に行ってしまった。後ろ姿を見送りながら、ヤスシ君がちょっといい人に思えてきた。



『今日、いいことあったんだ』

小学校からの友人のアツコに家に帰ってからメールを出した。



『何があったの？おしえて！！』

『ヤスシくんっていい人』

私は、今日の掃除時間のことをアツコにメールで説明した。

次の日、教室に入ると2人の友人から声をかけられた。

「いいと思うよ、ヤスシ君って。」

「応援するよ。」

えっ？どうして知っているの。

私は顔が赤くなっていくのがわかった。

≪もしかして、アツコが私のメールを他の人に送ったの？信じられない。≫

となりのクラスに駆け込んで、アツコの座っている机の前で大きな声で言ってしまった

「どうして他の人に教えたの？」

「あれ、転送しちゃダメだったの？」

大声で言い合う私たちを、となりのクラスの人たちが不思議そうに見ていた・・・。

私は気持ちが沈んだまま家に帰った。

「ただいま。」

「おかえり。何落ち込んでるの？」

母に今日の出来事を話した。

「でも、ユウコも悪いんじゃない。誰にも言わないでね、とは言ってないわよね。」

「だけど大切なメールを他の人に送るなんて失礼じゃん。」



「大切なことを伝えなければ、実際に話をしたほうがよかったのかもね。アツコちゃん だって、悪気があったわけではないと思うよ。」

「…」

私は部屋へ行き、母の言葉を思い出しながらしばらく考えた。

《アツコに悪いことしたな》

私は、ケータイを取り出しアツコにメールをした。



『今日はごめんなさい。明日話すから。』

私はアツコに伝えなければならぬことは何なのかを考えた。